

# 月津台地の大集落 額見町遺跡



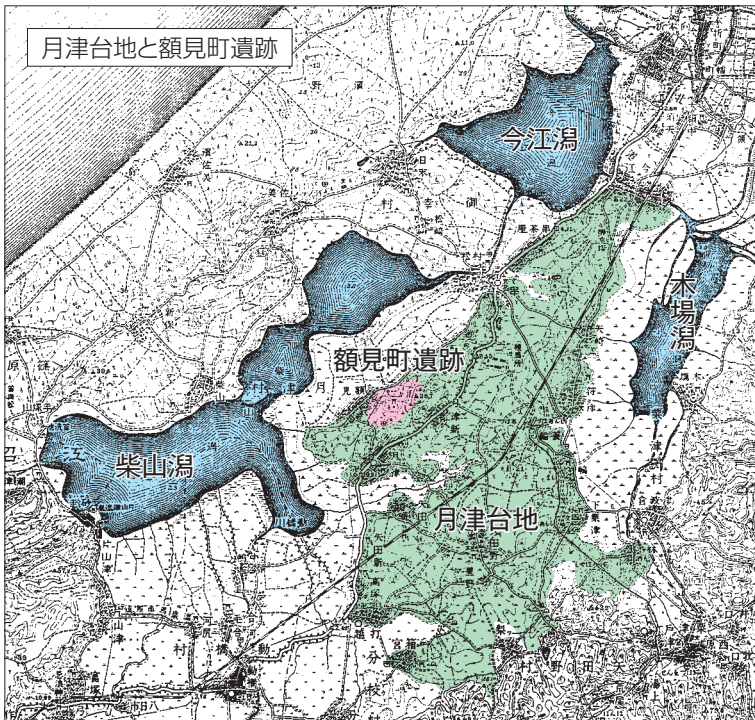
空から見た額見町遺跡(平成8年撮影) 月津台地の後方に干拓された柴山潟と日本海が見える。

加賀三湖に囲まれた月津台地は、縄文時代以降集落が連続と営まれており、西側には四四方方形のもの広がりをもつ古代集落である額見町遺跡が存在している。

この遺跡は、産業団地の建設に伴って約三万八〇〇〇平方メートルが発掘され、**堅穴住居**、**九基**、**掘立柱建物**、**三三〇基**などが明らかになった。集落の始まりは七世紀初めで、以後十

加賀三湖に囲まれた月津台地は、縄

文時代以降集落が連続と営まれており、西側には四四方方形のもの広がりをもつ古代集落である額見町遺跡が存在している。



(地形図は大正13年陸地測量部刊行)



額見町遺跡の竪穴住居と掘立柱建物(平成8年撮影)

額見町遺跡で注目すべきは、竪穴住居に設けられた特殊な構造をもつカマドである。これは、カマドの煙道えんどうを住居の壁に沿ってL字形に取りつけたもので、煙道を伝わる熱で住居内を暖め

ようとした施設と考えられ、中国東北部や朝鮮半島北部の竪穴住居に見られる「オンドル」と呼ばれる床暖房施設によく似ている。

この施設が見られ、いずれも七世紀代に造られたものである。同様の施設は、北部九州や近畿に分布しており、北陸では、月津台地の額見町遺跡、額見町西遺跡、矢田野遺跡、薬師遺跡に集中して存在する。

このことから、オンドル状の施設を造る習慣をもった人々が七世紀にこの台地を目指して大陸から来住したと考えられる。



額見町遺跡の竪穴住居(平成8年撮影) カマドからL字形に伸びた煙道は暖房機能をもった施設(オンドル状施設)と見られる。

ただ、この施設は七世紀末には見られなくなることから、冬の気温が大陸より高い小松では定着しなかったようである。

なお、額見町の集落は、七世紀代は竪穴住居が主体であるが、八世紀以降は掘立柱建物主体へと変化している。

(三浦純夫)

(写真は小松市埋蔵文化財センター提供)